初夢〈はつゆめ〉と焼〈や〉き餅〈もち〉（神崎町）

神崎郡の、ずうとずうっと、山ん中の、窪地〈くぼち〉の小さな村にのこっている話です。
その地の小さな学校で、家庭訪問にいくことになりました。でも、ここに住まいする人は、たいてい昼は男女とも山しごとで、家にいません。それで、先生たちは、夕方山からかえってくるころ家々をたずねました。

ある年のことです。たんにんの先生が、子どもの家へ家庭訪問にいきました。さいわいその日は、おかあさんがいたので、おかあさんと受持ちの子どものことについて、いろいろはなしあいました。話も終わって、いざ帰ろうとするところへ、おとうさんが山から戻ってきました。

「まあ、まあ、えらかったね、じき（すぐ）やきもちをやくから待っててね。」と、まるで子どもにいうようにいって、おとうさんを迎えました。

（はて、おかしいぞ、おとうさんが、えらいしごとをすませてかえりついたのに、やきもちをやくとは？）と、先生は思いました。（やきもちいうと、他〈ひと〉人のことを羨〈うら〉やむことだ、よく思わないことだ）と、先生は、また思いました。そこで先生は、

「一体〈いったい〉、やきもちいうたら、なんのことですね？」と、おかあさんにききました。

「おやおや、これは？…」といって、おかあさんは、やきもちのいわれについて話してくれました。

それは、こんな話でした。

昔、村の若い衆〈しゅう〉たちが、正月二日の初夢を見たら、どんな夢か、おたがいに語りごっこをすることになりました。年の多い順に、初夢を話し出しました。ところが、一人の男は、自分の夢をどうしても話しません。

「こんどは、お前〈め〉さんの番だよね。」

「いやだ、おらは話さん。」

「何をいうだか、おたがいに話そうちゆう約束しただねえか。」

「あんまり、いい夢を見たさかい（から）に、おらは話さんぞ。」

「そんげに、いい夢なら、なおのこと聞きたいが、ただで聞かぬさかい、どうでも話せ。」

「そうだな。二十五の年祝いのごつと（ごちそう）をすれば話す。」

それで、若い衆たちは、その夢が聞きたくて、ないしょの銭〈ぜに〉出しおうて、二十五の祝いのごっとをしました。男は、みんな腹一杯〈はらいっぱい〉 食べてからいいました。

「これっぽっちのごっとでは、おらの初夢は語れんが。そうだな、四十二の年祝いのごっとをすりや話す。」そこで、若い衆たちは、その時のごちそうをしました。ところが、やっぱり男は語りません。
こんどは、六十一の年祝いのごちそうを食わせといいました。これには、若い衆たちもおこって、

「そんげな夢きかんでもええ、こんげな奴〈やつ〉め、海へ流してしまえ。」と、大きな箱をつくって、その中に入れ、釘づけにして海へ流してしまいました。

箱は、海をあちこち流れて、しまいには鬼が島へ流れつきました。鬼どもが見つけて、ワイワイ騒ぎながら箱をあけると、中から若い男が出てきました。ところが、鬼どもがいうより先に、若い男がいいました。

「おい、鬼、おらは、悪いことをして、島流しになったのではない、食うのは待ってくれ。」

「なに、それならば、どうして、こんげなとこに来たのだ。」
「正月の初夢の語りごとを約束したけど、あんまりいい夢を見て、おらは語る気にならなかった。そしたら若い衆どもがおこって、おらを箱に入れて海に流して、ここへ流れついたんだ。」

「なになに、そんなら、よっぽどいい夢を見たんだな。その夢を、おらたちに話してくれろよ。」

「いやいや、それは、とんでもない、ただでは語れん。」

「そんなら、どうすりゃええんだ。」
「そうだな、鬼が島の宝物と、おらの初夢をかえっこしてもいい。宝物は、姿の見えなくなるというかくれ笠〈がさ〉とかくれ蓑〈みの〉、手をひとつポンとたたけば千里〈せんり〉を走るという千里車〈せんりぐるま〉、何でも望みの品の出るという打出〈うちで〉の小槌〈こづち〉…。」

「そんなら…。」
「いやいや、それには、もうひとつ足らん。おらは腹がへっとる、腹を満〈み〉たす餅〈もち〉がほしい。餅もふつうの餅じゃない、焼〈や〉いた餅〈もち〉じゃ、つまり焼き餅じゃ。」
そこで、鬼どもは、さて、どうすると、相談しました。ひとまず、この男のいう通りに、みんな出してやって、夢の話をきいたあとで取りもどそう。だけど千里車だけには、太い綱〈つな〉をつけて、逃げれんようにしておこうときめました。さっそく、それらの宝物と焼き餅を出しました。

すると男は、かくれ笠をかぶり、かくれ蓑〈みの〉を着て、打出〈うちで〉の小槌〈こづち〉と焼き餅を持って、千里車にのり、 「なるほど、この宝物は、ほんものだな。それでは、おらの夢を語るとしよう。」
と、手をひとつポンと打ちましたら、千里車がスーッと風のように走り出しました。
「そおら、逃げるぞ、逃げたら大へん。」鬼どもは、千里車につけた太綱〈ふとづな〉をひっぱりました。男は千里車の上で、むしゃむしゃと、鬼のくれた焼き餅を食いました。と、何ちゆうことだ。男には、ものすごい馬鹿力が湧〈わ〉いて、千里車といっしょに、ポオーンと海をとびこえました。そして、落ちてきたのが、この近所の山の上だった…と、おかあさんは、先生に話してくれました。

この土地のやきもちというのは、他人〈ひと〉をうらやむやきもちじゃなしに、焼いた餅のやきもちだということがわかりました。